

ミニ展示 展示シート

水郷松江

——橋を飾る擬宝珠——

多くの文人を魅了し、歌に詠われ、随筆に表された松江の水辺の風景には、しばしば優美な松江大橋が描写されます。

堀尾氏による松江開府以来、市街の南北を繋ぐ幹線道路として架け替えられ続けた大橋は、現在17代に至ります。松江城の堀を巡れば、北惣門橋、北堀橋、普門院橋など、擬宝珠に飾られた多くの橋が迎えてくれます。

水郷松江の景観に色を添える、橋を飾る擬宝珠をご覧ください。

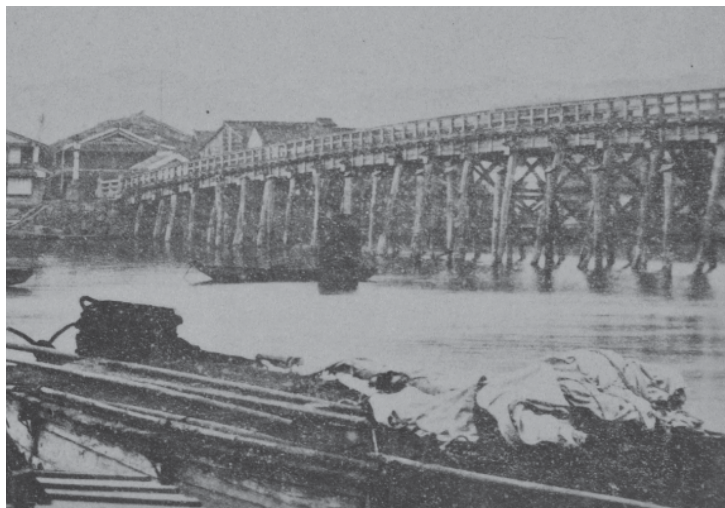


擬宝珠

青銅製、大正3年(1914)7月

16代大橋に取り付けられていたと伝わった青銅製の擬宝珠です。江戸時代より大橋は、擬宝珠で装飾された格調高い姿で、松江の人々に親しまれてきました。ところが、明治24年(1891)に架けられた15代大橋に、西欧から導入したトラスの技術が用いられたことで、姿が一変します。15代大橋は新技術を用いた進歩的な橋でしたが松江市民には馴染まず、明治44年(1911)の架け替えに際して、青銅製の擬宝珠が取り付けられ、昔の大橋が再現されたのです。

16代大橋の姿は写真に残されており、擬宝珠の形が分かります。展示品と見比べるとよく似ているのですが、内側の紀年銘により、展示品は大正3年(1914)7月に竣工した初代新大橋の擬宝珠であることが分かりました。



14代松江大橋 明治7年(1874)竣工

明治23年(1890)8月に島根県尋常中学校へ赴任したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、松江の朝の光景を、まるで舞踏会のように響く、大橋を渡る下駄の音とともに描写しました。



15代松江大橋 明治24年(1891)竣工

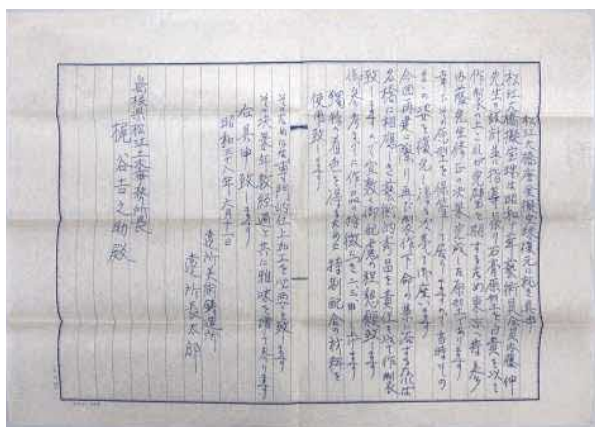


16代松江大橋 明治44年(1911)竣工

大正4年(1915)夏、松江に滞在した作家芥川龍之介の心をひいたのは、川の水とその川に架かる木造の橋でした。薄暮、雨にぬれて光る大橋の擬宝珠を望んだ時の懐かしさを書き残しています。



17代松江大橋 昭和12年(1937)竣工



松江大橋唐金擬宝珠復元に就き具申

昭和38年(1963)6月11日

大橋に青銅製の擬宝珠が戻ったのは、戦時に供出されてから20年後のことでした。製作したのは松江市栄町の遠所美術鑄造所です。供出された擬宝珠を製作した鑄造所であり、当時その石膏原型を保管していました。鑄造所を営む遠所長太郎は、擬宝珠復元に関する意見書で、次のように述べています。

昭和12年(1937)に完成した松江大橋の擬宝珠の石膏原型は、島根県出身の彫刻家内藤伸先生の設計と指導により作ったものです。完璧を期すために東京へ持参し、内藤先生自ら修正を加えた原型です。その原型を保管していますので、当時そのままの姿を復元することができます。擬宝珠の再建に際しては、名橋にふさわしい芸術的秀品を、責任をもって製作します。

この熱意が伝わったためか、遠所美術鑄造所は昭和38年(1963)に松江大橋の擬宝珠八基を製作しました。その後、昭和46年度から昭和49年度(1971~74)にかけて、青銅製の擬宝珠が追加製作され、20基の青銅製擬宝珠で飾られた現在の松江大橋の姿になりました。



擬宝珠

陶製、昭和20年代頃

戦時中の物資不足を補うために金属類回収令が発せられ、青銅製の擬宝珠も供出されました。取り外された松江大橋、京橋、北堀橋、佐太橋の擬宝珠が並んで写っている写真には、昭和18年(1943)2月27日の日付が記されています。当時の松江大橋は現在架かっている17代目で、展望台の灯籠もまた供出されています。

金属不足の時代、橋を飾ったのは出雲地方の窯元が製作した陶器の擬宝珠でした。展示品は大橋に取り付けられていた陶製の擬宝珠で、萬祥山窯で作られたことが、内側に押された印から分かります。白瀧天満宮の南東に架かる天神橋には、今も陶製の擬宝珠が、青銅製の擬宝珠と共に取り付けられています。



擬宝珠の製作道具

昭和39年(1964)

遠所美術鑄造所は、大橋以外の擬宝珠や金具の製作も行いました。

松江歴史館の北、松江城の堀に架かる北堀橋の擬宝珠も遠所美術鑄造所が手掛けたもので、鑄型を作るための金型などが残っています。この金型を元に、12基の擬宝珠を製作しました。